# わが心の遍歴

## （5）人間のいのち

花岡　永子

**花岡　永子（別姓：川村　永子）　/はなおか・えいこ**
1938年生まれ。'59年京都大学文学部入学、'63年同学部哲学科（宗教学）卒業。'68年京都大学大学院宗教哲学博士課程中退。西ドイツ・ハンブルグ大学神学部組織神学科博士候補生コース留学、'73年同大学より神学博士（Doktor der Theologie）の学位を取得。'87年師家（しけ）の印可証を授与され、女性の老師となる。'96年には京都大学より文学博士号を授与される。京都大学、大阪大学、神戸大学他で哲学、宗教学、倫理学、ギリシャ語、ヘブライ語、ドイツ語などの非常勤講師を経て、現在大阪府立大学大学院人間文化学研究科教授として哲学、宗教哲学を教える。著書は『宗教哲学の根源的探求』（北樹出版、'98）、『心の宗教哲学』（新教出版社、'94）、『禅と宗教哲学』（北樹出版、'94）、『キュルケゴールの研究』（近代文芸社、'93）、『キリスト教と西田哲学』（新教出版社、'88）他多数。

ボストンでの学会の後、ニューヨークで初めて東機貿の佐多保彦社長にお目にかかり、そこから4、5時間も自動車に乗せて頂いて、山奥の禅の修行場に行った。大きな湖の傍の大きな禅道場であった。沢山の修行者が修行中であった。嶋野栄道老師様から沢山のお話を伺った。翌日には、ニューヨークの街中の大菩薩禅堂金剛寺で、奥様をもご紹介頂いた。どれだけ大変なご指導を、ご夫妻でなさっていらっしゃるのかを、心からの驚嘆の念をもって実地に見聞、経験させて頂いた。

（注：嶋野老師様には、その2年後、筆者がスイスのエラノス会議の講演に招かれて行った時に、その会場の大食堂で偶然お目にかかった。余りの偶然の不思議さに、目に見えぬ世界の連なりを思い、深く感動した。）

その日の午後は、ニューヨーク大学の医学部を見学させて頂き、エイズの研究室でその解説等も聞かせて頂いた。その夜は、ニューヨークの街全体が見晴るかせるニューヨークの物凄い高層ビルの最上階のレストランで、最高の夕食をご一緒させていただいた。

翌日は、ロサンゼルスの禅センターに、何時間も砂漠の中を自動車で走って行った。砂漠が途中で山となり、幾つもの山を越えて、やがて高い山の上の禅道場に着いて、初めてお目にかかる前角博雄老師様にお迎え頂き、接心中の会合に迎え入れて頂いた。そこで1時間程、30人前後の修行中の皆様にお話をし、更に、秋月先生のお話の、思いがけない（筆者はどなたか英語の達者な方が通訳してくださると思い込んでいた）英語の通訳を冷や汗一杯で成し遂げた。夜は、ロサンゼルスの街にある前角老師様のお寺で集会に参加した。

翌日は、東機貿の待望の人工呼吸器を製造する会社（ニューポート・メディカル・インストルメンツ社）を見学させて頂き、夜は佐多社長のご家族の皆様との楽しい夕食の後、素敵な会話のひとときがあった。その時、深い禅のお話を、全員の皆様になさった秋月龍珉（りょうみん）先生は、もうこの世にはいらっしゃらない。また前角老師様も、御奥様と幼い3人のお子様をお残しのまま、ご他界された。1995年の群馬大学北軽井沢研修所での求真会の講演会にお招き頂いた時、前角老師様の御令弟（群馬大学教授）に、偶然お会いし、いろいろお話を伺った。出会いの余りの不思議さに、見えない力を感じ、他者や世界の為に力強く生きていかなければならないことを、心底から感じない訳にはいかなかった。

### 1.人間のいのち

宗教哲学の道を歩み始めたのは、前にも述べたように、第二次世界大戦の日本の敗戦前後に、人間性の歪みや人間を自らの生きる為の道具や手段とするような、正にあのドイツの哲学者であるカントが戒めた人間の堕落した生き方を目の当たりにした結果であった。真の人間性を、更には本当の宗教のあり方を求めてのことであった。

これは、日本の敗戦前後の堕落し切った時代的状況が、筆者に与えた当然の働きかけであった。戦争で、沢山の親しい人々の命が失われた事実、緑の野や畑が焼けただれた姿、広島の原爆による焼け野原の無惨さ等々は、幼い頃の筆者の心をズタズタに引き裂いた。その心の傷は、筆者に、人間の「いのち」や万物のいのち、人間の生きる道を考えさせることになった。

そんな生い立ちを過去にする筆者には、東機貿が人工呼吸器を製造している事実と、やがては、そのメーカーを世界一の人工呼吸器メーカーにしようという佐多社長の夢（上記の写真に映る『額』の字は、三島の竜澤寺（りょうたくじ）に居られた山本玄峰老師の絶筆の「夢」であり、また、社長ご夫妻の三人のお嬢様方とそのお友達のフランス人少女のシャツに書かれている字も「夢」）とは、この上なく素晴らしいものに思われた。ニューポート・メディカル・インストルメンツ社の中には、その人工呼吸器によって救われた人々やその肉親の方々や公の機関からの沢山の感謝状やその新聞記事が掲示されていた。その記事は、筆者が少女時代に広島で幾度となく見た、原爆資料館の（人間として余りにも惨めな気持ちへと駆り立てられざるを得ない、人間同士の殺し合い、国家相互の滅ぼし合いの）記事に比して、素晴らしい、明るいものであった。

1992年8月、向かって右から、佐多社長ご夫妻、3人目、4人目、7人目が、ご令嬢方。
中央が秋月龍珉老大師。向かって左端が筆者。

1992年8月、ニューヨーク郊外の禅道場にて。
向かって右から、佐多社長、秋月老大師、嶋野栄道老大師、筆者の順。

東機貿に働かれる皆様の夢とその理想のあり方に、今でもなお、心からの敬意を抱かざるを得ないと同時に、その夢の実現と、その理想の追求の成功を、心から願わないではいられない。この願いは、筆者のみでなく、心ある世界の人々の心からの願いでもある筈である。しかし、この旅でご一緒であった秋月老大師様にも、旅先でお目にかかった前角老大師様にも、またその当時は、まだ元気であった筆者の両親にも、天寿を全うされて大いなるいのちへと帰還されたわけであるから、もはやこの世では、親しく個人的に出会うことはできない。

人間のいのちは、一体どのように理解され、生きられるべきなのであろうか。いのちが問題となる時には、哲学者の西田幾多郎が分類しているように、先ず、物質的生命、生物的生命、精神的生命という3段階に区別される。

しかし、もう少しこれを細かく考えると、生物的生命と精神的生命との間に動物的生命が、また精神的生命の後に宗教的いのちが置かれる方が、人間のいのちが理解され易くなると思われる。そうすると、生命は、単純な方から、物質的生命、生物的生命、動物的生命、精神的生命、宗教的いのち、と5段階に理解されることになる。

このような生命の理解において、脳死による臓器移植がなされる場合には、物質的生命、生物的生命、動物的生命における臓器移植は、比較的容易に理解されることができる。
一方、精神的生命と宗教的いのちにおいての臓器移植の意義は、あまり明白には理解されることができない。というのも、筆者にはすべてのものごとは、それぞれそれ自らの立場にふさわしい、それ自ずからに開ける各々の立場と、それと同時に風土的な地域差から出てくる西洋思想と東洋思想の根源から、更にエロス（人間的な、一切を奪う向上的愛）を核心とする哲学とアガペ（神的な、一切を与えようとする自己空化的愛）を中心とする宗教の根源から、また、世界思想の二大思潮となっている仏教とキリスト教の根源からも、考察されなければならないと考えられるからである。

以上のように、西洋思想と東洋思想の、また哲学と宗教の、そして仏教とキリスト教の、根源から、精神的生命と宗教的いのちが理解されようとする時には、思考や思索の基礎となる有と無を中心とした枠組みとしての「パラダイム」が使われると、事柄の理解が、容易となると考えられる。

何故ならば、私たち人間のいのちにとって最も重要な実施である脳死による臓器移植は、日本にとって、今世紀最後の、最も重要なテーマのうちの一つであり、かつ日本の宗教・思想と医学・技術との葛藤と調和の上で成り立った筈の実施であるが、これには、そう簡単には賛同できない根拠があると考えられるからである。

というのも、脳死による心臓やその他の人間のいのちを保つのに重要な臓器の移植は、どのような場で考えられるかによって、その是非が変化すると考えられるからである。先に見た、物質的生命、生物的生命、そして動物的生命の段階においてのみ脳死による臓器移植が考えられる場合には、さして問題は無さそうに見える。しかし、それは、精神的生命と宗教的いのちにおいては、それ程容易な問題ではなくなるのである。

## 2.新しいパラダイムとしての「絶対無」の追加

西洋の伝統的な主流の形而上学においては、一切は、存在（being、有）や未存在（not-being 、未-有)や非存在（non-being、非-有）と、また不安や絶望やキリスト教的な罪意識は、相対的無（re1ative nothingness)と表現される（例としてはキェルケゴールの実存思想が挙げられる）ことが普通である。キリスト教の神すら絶対の存在（有）と理解される時代もあった。
更には、キリスト教の神の死の経験は、例えば、二―チェにおけるように、虚無（nihi1）と表現される。しかし日本の鎌倉時代以来、今日に至る迄の仏教系の思想や哲学においては、無情（heart1essness）とか無（nothingness）や、絶対無（abso1ute nothingness 、西田哲学の用語）という表現が使われてきている。
（注：しかし、旧約聖書時代の神や、現代の最先端を行くA.N.ホワイトヘッド［1861-1967］における神は、「出来事」（event）や、出来事における「働きそのもの」と理解されており、このような神理解は、有（存在）と無（非存在ないし未存在）の根源である絶対無の働き〈自己限定〉そのものの表現として、現代に相応しいと考えられる。）